準備委員会企画シンポジウム 4

“Nothing about us without us!” がもたらすもの

—— 障害者権利条約から見る特別支援教育 ——

Changes Brought by “Nothing about us without us!”; Reconsidering Special Needs Education Through Convention on the Rights of Persons With Disabilities

HIROYUKI ARIKAWA, TADASHI KOUYAMA, NORIO SYUUSA AND TOSHIYUKI IWANAMI

企画・司会 有川宏幸 (新潟大学)
話題提供 神山忠 (岐阜特別支援学校)
話題提供 周佐則雄 (ナマラエンターテインメント)
話題提供 岩浪敏之 (K - B O X)

企画趣旨

2006年、障害のある人の尊厳と権利を保障するための国際人権条約である“Convention on the Rights of Persons with Disabilities”(以下、「障害者権利条約」とする)が採択された。日本は2007年にこの条約に署名、2014年1月に批准書を国連に提出し、140番目の締約国となった。この批准までの間、国内法の整備が進められ、2013年、「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」が可決、成立(平成28年4月1日施行)するに至った。この法律は、障害者基本法第4条の「差別の禁止」を具体的に規定したものであり、「合理的配慮(reasonable accommodation)」をしないことは、「差別」にあたることを明記している。

「障害者権利条約」では「合理的配慮」を、「障害者が他の者と平等を基礎として全ての人権及び基本的自由を享有し、又は行使することを確保するための必要かつ適当な変更及び調整であって、特定の場合において必要とされるものであり、かつ、均衡を失した又は過度の負担を課さないもの」としている。

今、改めて障害者を取り巻く社会の在り方について議論が起きている。「障害者権利条約」の基本的考え方に従うと、「合理的配慮」の提供にあたっては、障害のある人達と、その周囲の者達が、彼らの権利の行使を持続可能とする社会構造を、共に構築していくことが求められている。

Nothing about us without us! (「私たちのことを、私たち抜きで決めてくれるな!」)。これは、1960年代にアメ

リカで始まった自立生活運動(Independent Living Movement)の中から出てきた言葉であり、障害者権利条約の制定過程においても、障害当事者の間で口々に叫ばれた重要なスローガンである。

さて、このスローガンに私たちはどれだけ耳を傾けてきたのであろうか。また心理学は、彼らの「特殊性」に焦点を当ててきた。

一方で、障害当事者は、こんな我々の姿に何を見てきたのであろうか。それを聞き、これからの特別支援教育について一度考えてみたいと思う。これが、本シンポジウムの企画主旨である。

学習障害の立場から

神山 忠

1. 略歴

1965生まれ。高校卒業後、陸上自衛隊に入隊。夜間短期大学に通いながら、教員免許取得。中学校、小学校教諭を経て、現在は、特別支援学校教諭。

学習障害(読字障害)。「文字を文字としてとらえる」「文字の音韻処理(音読)をすること」に困難がある。

2. 私の障害とは

私の障害はディスレクシア(読字障害)です。文字を、文字としてではなく、壁紙に描かれた幾何学模様に感じます。「図と地の関係の処理」も難しい。授業などで、資料を見せられて「ほら、〇〇がいるよね」と問われても、それがどこに隠れているのかわからない。他にも、縦書きの文章がどうしても読めない。教科書は縦書きで書いてある物が多いので、これを読みなさいと言われると、激しくうねる感じがしてきました。こうなると、もう立っているのがせいっぱいでした。

小学校の高学年から中学生の頃には、「目が縦に並んでいたら、縦書きの文字も読めるようになるだろうか」と考えていました。目が縦になっていれば、周囲

が、どの様に思うかと言うことはもちろん想像できませんでした。でも、それ以上にみんなと一緒に学べるのなら、それでもよいと思っていたのです。

私の脳が、文字として認識したものについては、拾い読みをすることは可能です。でも、文字情報から音を想起することはとても難しい。私にとっての第一言語は、「図」です。文字の意味も、字面で理解し、頭の中で図とのマッチング作業を試みます。「あっ、あの字面は、あの図の事だ」と、図とのマッチング作業をすれば意味は汲み取れます。

3. 学校での支援

小学校の時にこんなことがありました。新しいクラスになって、新しい班も決まって、ちょっと一安心していた時に、班に1冊ずつ新しいノートが配られました。先生は、「このノートに、自分の思っていることを、それぞれに書いて、それを班のみんなに回します」と説明しました。私は「そういうノートをするのか。頑張ろう」と思いました。その時、先生は思いついたように、こんなことを付け加えたのです。

「そうそう、神山君の班の人は、みんな“ひらがな”で書いてあげてね」と。私は、その言葉を聞いて「もう、教室から駆け出していきたい、それができないなら机の下にもぐりたい」、そんな気持ちになりました。

クラスの4分の3は、私のことを知りません。私を知らない友達に向かって、早々に「神山は、勉強できん奴やぞ」と言われたようなもののなのです。もちろん、先生にはそんな意地悪な気持ちは微塵もなかったはずですが、私にはとても恥ずかしいことだった。良かれと思ってやったことでも、当事者から見ればそうではないこともあるのです。

「ひらがな」ばかりの文章はとても読みにくい。例えば、「あるみかんのうえにあるみかんをもって行ってね」と言う一文があったとします。ひらがなだけだと、よくわからない。でも、「アルミ缶の上に在る蜜柑を持って行ってね」「アルミ缶の上にアルミ缶を持って行ってね」と、カタカナ、漢字、ひらがなを混ぜて書いてもらえれば、私にはこの問題は解決します。学校では、なぜか「勉強ができない子には、“ひらがな”で」と言うことが配慮の鉄則のように言われることがあります。でも、かえってわかりにくいと言うことが実は多くの場面であります。

他にも、小学校の教科書には、習った漢字と、習っていない漢字の関係で、「ひらがな」と漢字が混ぜ書きになっている。例えば「努」が既習でなければ「努力」は、「ど力」と書かれる。こうなると、私の場合

は字面と図のマッチング作業はできません。私にとっては、初めから熟語のように字面で示してもらう方がよいのです。さらに色を変えてふり仮名をふってもらえると、もっと助かります。「なぜ、ふり仮名に色を付ける必要があるのか」とよく問われます。私は、どこまでが漢字で、どこからがふり仮名か、わからなくなってしまう。一生懸命に字を覚え、漢字テストに臨んだら、ふり仮名の部分も合わせて覚えていたもので、そのまま解答してしまった。当然、誤答です。「ひらがな」と漢字部分の色が変わっていれば、別々のものとして区別して覚えることができたのです。

他にも、文字がぎっしりと詰まった文章は、読むことが難しい。「拡大コピーをすれば読みやすくなるから」と拡大コピーを渡されることがあります。でも、単純拡大で資料を渡されても、重い、大きいだけで扱いにくい。私の場合は、余白や行間、文字間、書体の関係で読みやすさが変わってくるのです。

教室の中には、実際には、様々な学び方を必要としている子ども達がいます。でも、教員の中には学び方には唯一の方法しかないと思い込んでいる人がいます。そして、この方法で勉強しなさいとプレッシャーをかけている。そのように感じています。

4. 支援ニーズと学校

平成14年に行われた文部科学省の調査では、通常学級になんらかの配慮を必要としている子どもが、6.3%いることが明らかになりました。その後、何を始めたのかと言うと、手厚い教育の名のもとに、切り離しを行ったのではないかと思います。実際、10年たって、もう一度調査をしたら、今度は6.5%になっていた。これを、ほんの0.2%の増加と見るか、従来は通常学級にいた子どもを切り離したうえでの0.2%の増加とみるか、いろいろと考え方はあると思います。私は、後者なのではないかと思っています。これに対して、さらにまた切り離しをしてしまったらどうなるのでしょうか。ふるいの目は、さらに厳しくなっていくのではないのでしょうか。

確かに、切り離しをすることで、校内でのトラブル等は少なくなって、一見やりやすくなったのかもしれませんが、でも指導力は、明らかに低下しています。

さらに子ども達同士も、様々な個性と触れ合う場を失っていきます。学びの輪は、どんどんと小さくなっていく。結局はより脆弱な社会になっていく気がします。

バランスの良い発達を目指すことで、型に収まる子どもを作っている。いびつで尖ったままの子どもがい

でも、よいのではないかと思います。でも、いびつに尖っているところは削り、足りないところをなんとか埋めようと言うことばかり考えている。「尖っていてもいいよ」、「あの子のあれって、すごいよ」、「あの子にこの仕事まかせたら、凄い仕事してくれるよね」、そんな社会、集団の方が、より豊かなのではないでしょう。

私たち大人が、子ども達に「よい子」に育って欲しいと思っているのは確かです。でも、その「よい子」とは、実は大人にとって「都合のよい子」となってしまっていないでしょうか。本当は、トマトなのにもかかわらず、「メロンになれよ、メロンになれよ、メロンになれば、みんなに高く買ってもらって重宝がられるよ」と言って、トマトにメロンの肥料をあげ、メロンの温室に入れて育てようとしている。これも当事者の声を聞けば、「苦しいよ」と言っていることが理解できるはず。理解した上で、その子に合う環境を整えてあげる。トマトならば、トマトにしかできない人生を送る方が、実は何倍も豊かな人生になるような気がします。

5. 社会モデルと生きづらさ

わたしの転機は、自衛隊に入った時です。それまでは、もう劣等生でしかなかった。でも、自衛隊に入ってみると、文章による教育は本当にごくわずかでした。口頭で教えられ、そして実物を操作するという学びでした。私にとって、その学び方は合っていました。おかげで、いろいろな任務を任せてもらえ、多くの資格も取れました。ズタズタだった私の自尊心を取り戻すことができました。成人式も隊の中でやってもらいました。その時に「今までの20年を振り返り、そして今後どう生きていくかを考えなさい」という話がありました。それまでの私は「こうなったのは親のせいや」「先生のせいや」「教育のせいや」と、人のせいにばかりしてきました。この先どうしていくかを考えた時に、「自分が、勉強のわからない子の気持ちのわかる教師になったらよいではないか」。そう思うようになりました。

それから、夜間の短大に通いました。短大は当然、文章による教育でした。でも「この方法で勉強しなさい」と限定されなかった。おかげで、自分の得意な方法や、様々なツールを使うことができました。教員免許もとることができ、今に至っています。

教員になってもいろいろありました。ストレートで大学を出て、ストレートで採用された先生と、採用までに3年かかった私が同じ学校にいる。1か月たって、

給料を見せ合った。その先生は、年齢がかなり若かったのだけれども、給料はとてもよかった。そこで事務の人に聞いたわけです。すると「あなたの方が年齢は上だけれども、夜間の短大卒で二種免許です。だから給料表はこちらになる。あの人は、四年制の教育学部を出て、一種免許を持っている。だから年齢は若いけれども、給料表はこちらになる」と言われました。この時、「そうか、今の社会のシステムって、制度を作っている人が生きやすいようにできているのだ」と感じました。だからと言って、学校教育が社会のシステムを作る側に特化したものになってはいけません。今の社会システムのままでは、障害や、生きづらさを感じる人は多いままだと思います。社会モデルによる障害者は、少なくないのです。

肢体不自由の立場から

周佐則雄

1. 略歴

1975年生まれ。脳性麻痺。10年前に、養護学校時代の先輩、DAIGO氏と再会。お笑いコンビ「脳性マヒブラザーズ」を結成、地元で活動を始める。2010年、NHKのEテレ「SHOW-1グランプリ」で、初代グランプリを獲得。

2. 知的障害児クラスに入学して

私は、小学校から高校まで養護学校へ入っていました。実は私、6歳の4月から学校に入っていない。12月に入り、そこで小児療育センターの中にある養護学校に入りました。学校は、知的障害のある子どものクラスと、身体障害のある子どものクラスに分かれていました。私は、当時、言葉も遅く、コミュニケーションも十分にとれませんでした。そのため「お勉強はできないのではないか」ということになり、知的障害のクラスに入ることになりました。でも、何日かみんなと勉強していくうちに、「この子、本当は勉強ができるのではないか」と言う人たちが出てきました。その時の担任の先生が私に「君は今のクラスでこのまま勉強をつづけたい？ それとも、もう1つの方のクラスで勉強したい？」と聞いてきました。当時、仲の良かった友達が身体障害クラスにいたので、「もう1つのクラスで勉強がしたい」と言いました。それで身体障害のクラスに行くことになりました。今の自分があるのは、その時の友達と担任の先生のおかげかなと思います。それがなければ、脳性マヒブラザーズとしての活動もなかったと思います。

小学校4年生の時に、一度、地元の普通小学校に入

れるかもしれないということになりました。ですが、まだ当時の学校は、バリアフリーじゃなかった。私は、動きも遅く、なかなか教室にたどり着けない。おまけに、勉強もそれほどできなかった。結局は、そのまま高等部まで、養護学校にいたることになりました。

小学部、中学部の頃は、学力ごとにクラス分けがされていました。違う学年の友達とも、一緒に勉強ができたのは良かったのですが、1つ悲しいことがありました。後輩と一緒に勉強していた時のことです。私が中学3年生で、後輩は中学2年生でした。でも後輩の方が学力は高く、彼は中学3年生の勉強していました。そして私は小学6年生の勉強をしていたのです。これには、とても悔しい思いをしました。

また養護学校は、人数が少ない。そうすると、普通の学校と違って、さぼることができない。遅刻したり、居眠りしたりというドラマのようなことができないのです。試験も学力がみんな違うわけですから、試験問題も違う。カンニングなどできないわけです。ちゃんと勉強しなければなりません。

3. 高等部を卒業して

高等部を卒業後、1年間、職業訓練を受けることになりました。そこで私は、生まれて初めて健常者として扱われることになります。でも、健常者扱いされても、障害はあるわけです。すると「あなたは、障害者だからこういうことができない。でも、健常者はこういうことができる。だから、あなたも、それができるようにならなければいけない」と言われたのです。養護学校だと、マイペースでいることが重視されます。でも、訓練校に入ると社会に合わせることを求められます。当時、私はコーヒーが飲めなかった。すると「あなたは商談先でも、絶対にクリームパフェを食べるでしょう。でも、それではいけない。だから、コーヒーを飲む練習をしろ」と言われました。しかも砂糖なしで。

養護学校では試験は形だけでした。けれども、就職試験は形ではなく、実際に受けるものです。これも訓練校で、はじめて気づかされたことでした。その後、20社の入社面接を受けましたが、すべて不合格になりました。

4. 就職に失敗して

不合格の通知には「この度はご縁がありませんでした」と書かれています。私は「ああ、“この度”ということは、次は合格通知がくるってことなんだ」と本気で思っていました。すると周囲の人たちは「来ないよ。これは、次は来ないということなんだよ」と言う

のです。それを何回か経験することで、段々と「これが社交辞令というものなんだな」とわかってきました。21歳の頃のことです。「健常者って、なんて嘘つきなんだ」って思ったのを覚えています。

こんなことが続き、結局、作業所に入ることになりました。でも作業所の生活は私にとっては退屈なものでした。また、小さい頃からアニメや漫画が好きで、どうしても声優になりたいと言う夢がありました。そこで声優のオーディション情報を探していました。ある時、地元ラジオ局が「アマチュア大募集」という記事を出していたのです。私は「性格があまりちゃんだから応募できる」と早速応募しました。

面接で話をしていると「君は、アマチュアの意味をどう捉えていますか」と聞かれたのです。私は「アマチュアって、自分に甘い人達のことを言うのですよね」と本気で答えました。笑われました。「アマチュアというのは、お金を払うまではいけないけれども、その技術がある人のことを言うのだよ」と教えられたのです。「ああ、また勘違いしてしまった。でも、この際、ラジオ番組に出られるのだからいいや。そのうち失敗するかもしれないけど、挑戦しよう」と思い、ラジオの仕事をするようになりました。

5. 脳性マヒブラザーズとして

今活動している脳性マヒブラザーズについてお話したいと思います。新潟に、心身障害者パフォーマンス集団「こわれ者の祭典」というものがあります。今から約10年前、そこに私も入っていました。そこで再会したのが、私の学校の先輩であるDAIGOくんです。このDAIGOくんが、ある時、お笑いコンテストに出たいとメンバーの全員に声を掛けていました。けれども、誰も反応しない。かわいそうだなあと思い「1回だけならいいよ」と始めました。それからもう10年です。だまされてしまいました。

でも、おかげでNHK Eテレの『バリバラ』という番組に出させていただきました。そこでShow-1グランプリの初代チャンピオンにもなれました。レギュラー番組では、新潟から大阪まで「千人笑わす旅」という企画にも出ることができました。

この番組で大変だったのは、NHKスタッフが、私たちが障害者だということを完全に忘れていたことです。番組では、朝早くから夜遅くまでロケをします。脳性麻痺があるので、どうしても動きは遅くなってしまふ。ある日、深夜1時まで撮影をしました。その後、遅い夕食を済ませ、お風呂に入り、ようやくベッドに辿り着いたら、もう朝になっていた。そんなことがそ

の後もよくありました。

それでも、脳性麻痺という障害があったから、こういう仕事のできたのかなとも思います。昨年は北川景子さんが主演の『抱きしめたい』という映画にも出演することができました。

6. 障害と個性

最後に、学校や、脳性マヒブラザーズの経験を通して、私を感じたことをお話ししたいと思います。

今、社会では障害は「個性」とやたらと言われます。でも私は、生まれつき脳性麻痺があるので、障害を「個性」と言われると、よくわからなくなってしまう。この「個性」とは、私の「性格」を言われているのか、それとも私の「障害」のことを言われているのか、それがわからなくなる。「あなたの個性だから、ありのままでいいよ」と言われると、私の「性格」からすると「なんだ、何もしなくてよいのか。勉強も、訓練もしなくてよいのだな」と思ってしまう。

また、学校や施設の中にいると、世間のことが別世界のことの様に感じています。まるで映画やテレビの世界の様な感じなのです。歩いている人を見ると「なんか芸能人がいっぱい歩いている」という感覚になるのです。そんな中で、みなさんに「頑張っているね」と言われる。けれど、こう言われると「あなた達と、私たちとは別世界にいるけれど、頑張ってるね」と聞こえてしまいます。

今、芸人として壁にぶち当たっていることがあります。それは、自分たちはこれまで過程を褒められることはあっても、結果を求められてこなかった。今、相手とふたりで稽古をしていても「俺こんなに頑張っているのに、何が悪いの」と言われてしまう。でもお笑い芸人にとっては、過程をどれだけ頑張ろうとも、結果がすべてです。「結果を出さないとダメだ。結果が出て初めて仕事ももらえ、テレビにも出られる」と話しています。

「学校でも、過程だけを褒めるのではなく、ちゃんと結果についても教えてもらえていたら、こんな苦労はしなかったのに」と思っています。

アスペルガー症候群の立場から

岩浪敏之

1. 略歴

1975年生まれ。35歳の時にアスペルガー症候群と診断される。大学生生活に馴染めず、まだ引きこもりも経験する。現在、K-BOXで表現活動を行っている。

2. 気付かれない生きにくさ

私の障害、みなさんにはどのように見えますか。きっとわかりにくいと思います。私の障害はアスペルガー症候群です。両親が共働きだったため、母方の祖父母に預けられていましたが、その頃の話を知ると、まったく「お母さん、お父さん」とは言わなかったそうです。母と離れる時でさえも、泣いたりしない。父や母がいなくてもまったく平気。そんな子どもだったそうです。

私は絵を描くことが大好きでした。小学校の頃は、自由帳に好きなマンガの絵を描いたり、迷路などを描いたりして過ごしていました。サッカーや、野球などもやっていたのですが、「みんなでやるスポーツの楽しさ」というのがよくわからなかった。野球の楽しさを知ったのは、テレビゲームで野球ゲームをするようになってからです。

学校で困ったことと言えば、給食を食べるのがとにかく遅かった。でも、これには理由がありました。人と話していると、食べることが出来なくなる。私は、同時に2つの活動をすることがとても難しいのです。結局、食べることが遅くなってしまいます。それでも、給食が遅いということくらいでは、外から見ると特に配慮が必要だということにはならなかったようです。

ただ、私自身は、子どもの頃から、人と一緒にいるとなぜか違和感がありました。とにかく周囲の話について行けない。笑うポイントがわからない。どこで人の話に加わってよいかもわからない。なので、話は常に聞く一方でした。「ただ、そこにいる」、そんな感じの子どもでした。周囲にも、学校の先生にも、困っているようには見えないのです。

この状態は大人になっても続きました。大学に入学して1年、寮生活をしていました。ここでの集団生活に、そうとうなストレスがかかっていた。そのストレスが、どんどんと溜まっていく。そして2年生の時には、引きこもりになってしまいました。大学の授業にも出席できなくなってしまったのです。それでも、なんとか大学は4年で卒業しました。でも就職活動はせずにおり、この頃に、金銭トラブルなどにも巻き込まれてしまいました。日に日にうまく行かないことが多くなってきたのです。こんな状態になっていても、周囲からの支援はありませんでした。特に家族からの理解が得られなかったことは辛かった。

3. 支援者との出会い

実は私は病院で診断を2回受けています。1回目は、金銭トラブルに巻き込まれ、裁判のために病院で診断

を受けることになったときです。10年前です。2週間おきにカウンセリングや、いくつかの心理テスト、脳のMRIなどを受けました。限りなく精神疾患があると考えられるが、診断はつかない。いわゆる心身耗弱状態とのことでした。

その後、8年前に引きこもりを支援するセミナーを自分で見つけ、そこでようやく様々な支援を受けることになりました。コミュニケーションセミナーを受けたり、履歴書の書き方を教わったり、面接や電話の応対について学びました。そのセミナーの講師だった方たちとは、その後も長くお付き合いさせていただいています。

この頃に受けたセミナーの中で、発達障害について知りました。テレビなどの特集番組も気になり、「自分もこの障害に該当するのではないか」と思うようになりました。親にも、それを伝えてはみたのですが、なかなか理解は得られませんでした。そこで発達障害支援センターの方に、相談をしました。それをきっかけに再度、様々な検査を受けることになり、ようやく35歳のときに、今の診断を受けました。

現在は、K-BOX というところで表現活動をしています。新潟には「こわれ者の祭典」という様々な生きづらさを抱えた人たちが、自らの生きづらさをストレートに訴える活動があります。9年ほど前にはじめて、それを見ました。生きづらい経験を「こんなに、ストレートに表現していいのか。こんなに恥ずかしいことをオープンにする人たちがいるのか。自分も、こんな風に表現したい」、そう思うようになりました。私は、絵が好きなので今は絵を発表したり、時々お笑いをしたりと、自分なりの表現活動をしています。

4. 教育について

最後に、今日は教育心理学会員の集まりということで、1つ、お伝えしたいことがあります。この前、テレビで「子どもが世界で一番幸せだと感じている国」ということで、オランダの教育について紹介されていました。オランダでは、小学校のうちから、子ども達は好きなことを学んでいる。もう少し、これについて学びたいということがあれば、もう1年、その教科を学習してもよいそうです。

でも、日本の教育には、こうした自由はありません。大人が、工場で大量生産された既成の服を、無理やり子ども達に着せている。そんなイメージが日本の教育を見ていて湧いてきます。もっと、教育の多様性を認めていくことも必要なのではないか、そんなことを感じています。

討 論

(有川) 神山さん、岩浪さんに、司会の私から質問したいことがあります。障害の診断を受ける前と、受けた後で、ご自身の生活の何が変わったのかを教えてくださいなと思います。

(神山) 私は今から15年ほど前に診断を受けました。教員になってからのことです。久里浜の研修所で研修を受けていた時のことです。研修で出される資料が膨大で、ついていけなかった。そこで「もう、研修を辞めて岐阜に戻ろう」と、研修担当の先生にお話をしたのです。そうしたら、検査してみようということになりました。結果は、音読が小学2年生程度、文字を読むのは小学5年生程度という結果がでました。これでは厳しいことがわかり、どの様な支援があれば研修を続けていけるか、考えていこうということになりました。診断を受けることで、配慮がもらえることになった。「診断=配慮」ということで、とても生きやすくなりました。職場でも、職員間で交わされる書類はデータにしたものを、サーバにあげてもらえるようになりました。とても助かっています。

逆に小、中学校に教育相談で回っていると、現場の子どもたちには、私が使っている文章読みあげソフトが、使えていません。子ども達は、診断をもらっているにもかかわらず、彼らに合った支援は提供されていない。相談内容も、どうすれば「普通に学ばせられるか」というものが多いのです。これは違うと思います。とても違和感を持っています。

(岩浪) それまでは、自分が抱える違和感に、ただモヤモヤした感覚がずっと続いていました。それが、診断が出たことで、ようやく安心しました。「やった着地点が見つかった」、そんな感じがしました。親も、ようやく、その診断が出たことで障害の理解をするようになりました。

(有川) 周佐さんにお聞きします。周佐さんは、今でも歩行訓練を受けていると、お聞きしました。

私、以前、就学前の身体障害の子どもたちの施設で働いていたことがあったのですが、その中で5年間かけて、ようやくクラッチを使って5メートル歩けるようになった子どもがいました。もちろん、その5メートルが、様々な身体機能を促進、維持していくために必要だということ was わかりました。

ところが、これが学校に行くと、ちょっと視点が変わってしまっていたのです。「少しでも障害のない人と同じ動作ができるようになる」ことが求められてい

たのです。少し歩けるということだけで、なかなか車椅子を使った生活をさせようとしないう。そういう経験をされたことはありませんでしたか。

(周佐) あります。高等部までは、歩行器を使って「歩きましょう」と言われ、ずっと歩かされてきました。けれども、高等部3年生の2学期に入ると「もう社会に出るのだから、今度は車椅子に乗りましょう」と言われた。この時、「あなたはもう、歩けないのだ」という烙印を押されたような気持ちになりました。車椅子の練習は、高等部の時から始めたので、今でも車椅子の漕ぎ方は、下手くそです。どうせ社会に出てから必要になるのだったら、初めから車椅子の練習をさせてくれればよかったのと思っています。

(フロア1) 神山先生に2点ほど伺いたい。1つは、採用試験を受けられた時には、特別な配慮はなかったと思うのですが、採用試験をどう突破したのですか。もう1つは、日常において困っていることはどのようなことがありますか。

(神山) 大学入試は、社会人枠でしたので、面接と口頭試問だけでした。でも教員採用試験は、そういうわけにはいかない。3年かかりましたが、ひたすら勉強しました。

過去の問題や他府県の採用試験の問題をすべて見て、「この字面がいっぱい並ぶ問題は、この答え」と丸暗記して臨みました。あとは、聞かれてもいない問題についても、自分が一生懸命勉強してきたことを伝えるために、裏面の白紙に知っていること、自分が経験してきたことをいっぱい書き綴りました。自分はこれだけの知識をもっているということを、いっぱい書いて、熱意をアピールしました。

もう1つの質問についてですが、困ることは非常に少なくなっています。ただ個人情報に関するものが話題となるときは、録音や、データではもらえない。今でもアナログで対応しています。これは、守秘義務がありますので、仕方がないと思います。

日常で困ることは、役場の窓口で、所定の様式に、その場で書くことができない。事前に1回行って用紙をもらい、それを持ち帰って、記入して、また別の日に持っていく。そういうところは困っています。

(フロア2) 私は特別支援学校の教員をしています。今日、お話を聞いて、自分が良かれと思ってやったことが、実は生きづらさを生んでいたりと、社会に出て困ったりする原因を作っていたことを知りました。やはり、そこにコミュニケーションがないということが、一番危険なことだと感じました。

そこで、質問です。どのようなコミュニケーションがあれば、こうした問題は起こらないとお考えですか。例えば、「嫌だ」「いらぬ」などのような伝達などがあると思うのですが、いかがでしょうか。

(神山) 「聞いていただける」という姿勢があるだけで、気持ちはとても楽になります。まずは「こちらに配慮してもらっている」という気持ちが抱けるだけですごく楽になるのです。ただ、逆に私の生きやすさには、直にはつながらぬこともある。それはなかなか言いにくいです。

(岩浪) 私は、提供される支援と、自分が求める支援が違うときは例を出して伝えるようにしています。「サボテンにあげる水と、普通のお花にあげる水の量は違う。普通のお花に、サボテンに必要な水の量をあげれば、当然、花は枯れてしまいますし、逆にサボテンに普通のお花に必要な水程度しかあげなければ、それも枯れてしまいます」などと伝えます。そうして、日頃から相互の違いをまず認めていくことが必要だと思います。

(周佐) 私たちは、身体障害が重くなればなるほど、相手が良かれと思ってやってくれていることを、断れない。断ってしまったら、この人からは、もう援助が受けられなくなると思っています。だから、我慢して領いてしまいます。

今、ピアカウンセリングを受けています。そこで言われることは「断っても、その人は、いなくなるから大丈夫だ」ということを教わりました。けれども養護学校の時には、断れなかった。先生も「がんばってるね、いい子だね」と言うので、いい子でいなくていけないと思っていました。だから、断るなんてできないのです。でも最近分かったことは「断っているのだ、それで喧嘩になったのなら、仲直りすればいい」と思うようになりました。もし仲直りできなかったら、それくらいの怒りだったと考えればよいのだとわかってきました。こういうやりとりを、障害のない人たちは小学生から、高校生の頃までに、友達や親との間で経験しているようです。だけれども、養護学校だと、障害者は天使みたいな扱われ方なので、私たちもすごくいい子でいなければならないと思っていました。

1つ、私からも皆さんにお聞きしたいのですが、「お前たちは考える力がない」とよく言われます。先生の立場からだと、この考える力を、どのように教えていますか。「考えるってこういうことだよ」と、相方に教えたいのですが、それが伝わらない。考えた

ことがないのです。学校の先生であれば、それをどう教えているのですか。

(フロア2) 方法は1つではないと思います。あくまで私個人のやり方ですけども、正解を伝えて、こうだよと言うのではなく、一緒に体験したことを振り返る。それを日々の中で繰り返していくことが1つなのではないかと思います。

(有川) シンポジストの神山さんも、特別支援学校の教員の立場です。今の質問について何かありますか。

(神山) 実に痛いところ突かれたなという気がします。今、学校教育では「教科書“を”教える」先生が多くなっていると感じています。「教科書“で”教える」先生が少なくなっています。指導書を片手に授業を進める先生もいます。まず教員の方が知識偏重型になり、自ら切り開いていく力を失っているのではないのでしょうか。今の質問を、多くの先生方に聞いていただけてよかったと思います。本当に「考えろ、考えろ」ではなく、「考える力をつける教育」を私たち自身がしていかなければならないはずです。

(周佐) もう1つ、フロアに質問があります。養護学校だと、少数、あるいは1対1の授業が多くありました。ですので、今でも多くの人たちの中に、ぼつんと1人いると、みんなに問われているのか、私個人に向けられているかがよく分からない。皆さんはそういう経験はありませんか。

(有川) なかなか、回答がないようですので私から。実は、周佐さんは、打ち合わせの時からこの話をしきりにされていました。彼が何を言いたいかという、ずっと自分たちは個別の教育を手厚く受けてきた。その代わりに「みんな」という考え方を学べなかった。「みんな」という問いかけは、障害のある自分たちにとっては、特別な「ことば」だと言うのです。

逆に私たちは、常に「みんな」というものからこぼれ落ちないように教育を受けてきました。それを強要され、必死で「みんな」の中に留まろうとしてきました。だから、「みんな」からこぼれ落ちてしまうことは、考えたくもないし、こぼれてしまっている人達のことを考えても来なかった。これはこれで、なかなか

辛いものがありました。この感覚の違いについては、障害のある人達と、障害のない人たちの双方で共通理解が必要なのかなと思います。

(フロア3) 今日のシンポジウムのタイトルが、「私たち抜きで、私たちのことを決めるな」ということですが、自分のことを自分以外の人から勝手に決められたという、このスローガンに反するようなことをされた経験があれば、教えていただけませんか。

(岩浪) よくあります。先生にというよりは、家族が自分の意思とは関係なくいろいろと先回りをしてやってしまう。また、社会人とはこうあるべきだという枠を勝手にはめられてしまい、とても困りました。

(周佐) どうしてもヘルパーさんの時間の都合で、自分の希望を変えなければいけないことがあります。必ず、ヘルパーさんと一緒に決めなければならない。これが、ストレスになる時もあります。反対に周りの人に昔から決められてきたので「あなたが決めなさい」と言われると、それはそれで怖くなる。自分で決めることも怖いし、決められてばかりだと嫌なところもあります。

(神山) 今現在でも、ディスレクシアだからといって手帳がもらえるかということ、そうではない。仮に、手帳がもらえれば支援をもらえるかということ、そうでもない。街の中には、何の配慮もない文字が並んでいる状態はきっと変わりません。そうなると結局は、「読めるようになった方がよいから」ということになってしまう。

読めなくても困らない環境整備があれば、こういう考え自体がなくなると思います。「普通になれ」ということではなく、普通に暮らせる環境整備を、お互いに顔を合わせて模索していくことが「合理的配慮」に繋がるのではないかと思います。

注) 本シンポジウムの内容は、話題提供者が学んだ当時の教育制度をもとに構成している。したがって本稿においても、「養護学校」という表記を、そのまま使用している。